

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	吉田 照良	指導教員 (主査)	杉本 希映

論文題目	中学生におけるいじめ被害経験の長期的影響に寄与する要因の検討
------	--------------------------------

本文概要

【問題と目的】近年いじめは、深刻な社会問題として広く認知されるようになった。いじめ被害者には抑うつなどの不適応症状が表れ(岡安・高山, 2000), それらのうちのいくつかは被害後数年が経過しても見られる場合がある(水谷・雨宮, 2015)。一方で、いじめ被害は被害後の状態に悪影響を及ぼすばかりではないことを示す結果が得られており(香取, 1999), いじめ被害経験と被害者のその後の適応状態との間を媒介する変数の存在が強く示唆されている(荒木, 2005)。本研究では、個人要因として、高ストレス下で健康を保っている人が持っている性格特性である「ハーディネス」(Kobasa, 1979), 環境要因として、いじめ被害経験時の「ソーシャルサポート」と、個人をとりまく集団の「学級雰囲気」を取り上げ、いじめ被害の長期的な影響に関連する要因を、個人要因と環境要因の相互作用という生態学モデルの視点から検討を行った。なお、本研究では、それぞれの要因がいじめの影響に、直接的な影響を与えているだけでなく、ハーディネスと学級雰囲気がソーシャルサポートを媒介して、いじめ被害によるネガティブな影響が低く、ポジティブな影響が高いという仮説の検討を目的とした。

【方法】大学生を対象に無記名式質問紙調査を実施した。有効回答数は806名。使用した尺度は、①性別、②年齢、③いじめ被害経験の有無とその時期(小学生・中学生・高校生)、④15項目版ハーディネス尺度(多田・濱野, 2003)、⑤いじめの深刻度(藤井, 2016)、⑥いじめの影響尺度(香取, 1999)、⑦学生用ソーシャルサポート尺度(石毛・無藤, 2005):親・友人・先生の3つのサポート源別、⑧学級雰囲気尺度(吉崎・水越, 1979)(⑦⑧は中学生のいじめ被害経験時の回想法)

【結果と考察】いじめ被害経験があると答えた群は全体の30.9%(249名)、そのうち中学生におけるいじめ被害経験があったのは、138名であった。各尺度得点における相関係数を算出したところ、各尺度といじめの影響に関連がみられた。相関分析の結果をもとに、共分散構造分析による仮説の検討を行った結果、ハーディネスと「規律とまとまり」「優しさと温かさ」の学級雰囲気が、ソーシャルサポートを促進していることが明らかになったが、それぞれがソーシャルサポートを媒介して、いじめの影響に影響を与えているという仮説は支持されなかった。ソーシャルサポートは、いじめ当時の被害の深刻度と関連が示されなかったことからソーシャルサポートがあっても、実際のいじめの解決につながっていなかったことが要因として考えられる。ネガティブな影響を一番抑制させているのは、ハーディネス、次に学級雰囲気の「規律とまとまり」であることが明らかになった。いじめ被害は、PTSDにかかわるストレス反応を引き起こし(富永他, 2002)、さらにPTSD患者において、トラウマ関連刺激を恐れ回避行動が増加することで、外傷後ストレス反応が改善しない場合があると考えられている(Fedroff et al., 2000)。よって、物事に対し積極的に自分自身を関わらせる傾向を持つハーディネスの特性(Maddi, 1988)により、トラウマの関連刺激である友人関係や学校を回避する傾向が抑制され、ネガティブな心理状態から回復していると考えられる。さらに、友人や教師からの直接的なソーシャルサポートではなく、「規律とまとまり」という学級雰囲気の方が、ネガティブな影響と関連しているという結果が得られたため、学校においては、「規律とまとまり」のある学級雰囲気を作るような学級運営を行うことが求められていると考えられる。いじめ被害によるポジティブな影響を促進している要因は、ハーディネスのみであったため、家庭において、ハーディネスを高めるような関わり(Maddi, 1988)の必要性が示唆された。